

樋口清之先生の博物学と私の半生

福井市美術館長

松村 忠 祀

69期神

私は、家が代々神主の家系であったため、当然のことながら國學院大學での専攻は、神道に関わる分野の講義内容を受講いたしました。三年生の昭和三十四年になって博物館学の講座を何気なく受講した時、その講義の先生が樋口清之先生で、その時の講義内容の新鮮さに思わず深く感動した。その時の感動が、今日の私と美術の世界との因果的な関わりとなっているように察する。

樋口先生の講義内容は、一言で表現するならば今日の「人間学」の分野を指しているように思われる。現代は、自然科学、人文科学共に極めて分野ごとの研究は深くても、他分野との関係は意外に切断されつつある現状を観るにつけ、樋口先生の博物学は、学問そのものを、人間の作り上げる人類文化の次元で常に追究されてきた。

先生は、その講義において学生に対して文明ではなく文化とは何か、学問は人間文化のためであって、決して文明のためではないことを博物学の学問分野の世界から、情念をもって指摘されていたのである。そのことを今も昨日の如く自らの胸中で活動している。

自らの半生とはと問われたならば、美術の分野に総てが魅せられてきたのである。私は、それなのに美術の分野について図太いほどに素人なのであるが、図太いほどに好きである。そのことは他者に譲れない。そのことを樋口清之先生の「博物学」が、私に國學院の院風として「而今」の魂を授けて下さった時、「美術館」とは何か、そして文明ではなく、常に「而今」のために文化の美意識を託して下さった、と思っている。従って常に岡倉天心の『日本美術史』の冒頭に「世人は歴史を目して過去の事績を編集したる記録、是れ大なる誤謬なり、歴史なるものは、吾人の体中に存し、活動しつつあるものな・・・」と説明している如く、歴史は今、現に生きて関わらなければいけないと説いている。そして、「山ヲ谷、西ヲ東ト茶ノ湯ノ法ヲ破り、自由セラレテ面白シ。云々」と千利休が高弟山上宗二に説いていることに二言はない。

近代の詩人中野重治は、「古今的、新古今的」ともに云っている。常に美術の世界では、歴史学を幹に「日々」を、そして「而今」の

理想を求めて美術館の機能を文化的な殿堂として大いに都会も田舎も活用しなければならない。是ならば人類文化にとって博物学や美術の世界は、近現代の人間学である、と云えると同時に人類文化の創出でもある。

近年の美術館は、都会も地方も「数」を求め、イベントを企画してきた。が、それは文明の世界で、文化の次元とは異なっている。日本中が、モノが氾濫し、消費社会の中で、過去の先人たちの生活の知恵で培ってきた大切な物作り、そして美意識を失いつつある現今、私たち美術館の在り方は、人寄せパンダであってはならない。そして、田舎の都会化であってはいけない。二十一世紀の素敵な田舎こそ文明ではなく、文化によって築きあげること樋口先生の博物学は、常に今も胸中で語りかけている。樋口先生の背後には、國學院の柳田國男、折口信夫先生の民俗学、そして私にとって忘れられない民間信仰の先駆者堀一郎先生が、美術館の唯一の仕事は、文化を後世の子供たちに確信をもって伝えることである。そして私は、ミロのビーナスと驚くが救世観音と素晴らしい、中国の北宋、南宋の絵も美しいが、雪舟の秋冬山水、等伯の松林図、宗達の象や風神雷神図と、そして唯一反近代を歩んだ富岡鉄斎の晩年の水墨、私は、最後に二十一世紀の唯一大好きなパブに、ピカソに出会ったことは、樋口清之先生を通して美術館に半生を関わった心の地ノ利を今、覚える。